

最後の木地師 金作じいさん

語り 藤村ヨシエさん

安比高原の広大なブナ林から流れ出す安比川。源流部は険しく人を寄せ付けないが、里に出るとその表情は大きく変わる。川の両脇に民家が並ぶその景色は、人の暮らしが川を迎え入れるよう。川は清冽な流れの上に人懐っこい表情を加え、集落を進んでいく。

かつて上流部の集落は「木地の里」と呼ばれていた。史実によると木地師がこの地で木地生産を始めたのは江戸時代のこと。その後、明治、大

正へと時代が進んでいくなかで、森林資源に恵まれたこの地は、中・下流の漆塗りや漆掻きの職人たちと補い合いながら全国でも有数の木地の生産地へと成長していく。最盛期には木地仕事に従事していた職人の数は五百人以上。屈強な男たちによって伐採された大木は安比川を利用して集落に

流送され、それを待ち構えていた木地師たちがロクロを回すという営みが数世紀にもわたって続けられていた。今は想像するしかないが、土地全体で木地生産に従事する村の光景は、森と人の理想郷を見るようだ。しかし、時代の変化とともに木地生産に陰りがみられるようになる。プラスチックやアルミ製品。モノの便利さが求められた戦後は衰退が加速していく。

最後の木地師と呼ばれた藤村金作（1912―2002）という一人の木地師が生きたのはそんな時代だった。「おじいさんがロクロを回せばしゅるしゅると木屑が飛



息子嫁の藤村ヨシエさん



ヨシエさんが所有する金作さんの作品

んであつという間に椀コができて、それがおもしろくてねえ」と在りし日の金作さんを語るのは、氏の息子嫁のヨシエさんだ。戦後、嫁に来たヨシエさんからは、「ちょうど水車動力によるロクロから電動に変わった頃。当時は型打ちの職人も雇ってました。でも、注文も減って数年後は一人でやってみましたね。自分でカシューを塗った椀コを背負って米と交換しに出かけたりもしてね。それでも食べれないから牛も飼ったし、百姓もやりました」と、木地仕事に変遷期を迎えた様子が伝えられている。でも、金作さんは「辞める」だけは口にしなかった。「お

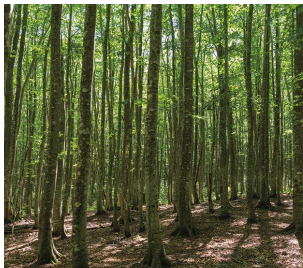
じいさん、木地挽きがやつぱり好きだったんですよ。身体が弱つても亡くなる数年前までロクロを回し続けて。九十一歳の大往生でした。」ヨシエさんの家では今日も変わることなく漆器を使った食事が続けられている。もちろん、金作さんが遺したものだ。木地の里の記憶は、食卓の上の小さな物語として今も語り継がれている。



在りし日の藤村金作さん。木地仕事の生き字引きだった

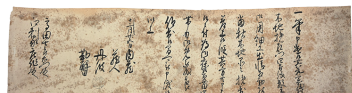
ブナ林（二次林）

安比高原に広がるブナの二次林は、昭和初期に木地や炭の原料として伐採された原生林が再生したものの。伐採時、母木となる木を残すことで種子による再生が促された。ブナの二次林は森に生きた当時の人々の営みを伝える証人である。



史実が語る木地師

安比川流域の木地師の祖・左衛門四郎は、江戸期に上流部の赤坂田で木地挽きを行っていた。盛岡藩の御用木地師を務め、文化3年（1806）には、武士の身分である「苗字帯刀」を許され、以降は「関左衛門四郎」を名乗った。



苗字帯刀の許可を記した赤坂田・関家古文書

流送（春木流し）

安代地区、安比川沿いの赤坂田に祀られている岩屋不動社。この付近は上流から流送した木地の原木を引き上げる春木場としても知られている。春の名が付くのは、主に流送の時期が雪解けで水かさが増す春に行われたからである。また、馬槌等を用いて原木を里まで搬送することもあった。



ロクロ

木地師が使用するロクロは、大正から昭和初期に水車を動力とするロクロが導入されたが、それ以前は手引きロクロ（写真）だった。このロクロは、ナヒキ（縄引き）と挽き師の二人一組で行われた。なお電動ロクロは戦後に導入されたが、その頃には安比川流域での木地生産は衰退していた。



人力で木地を挽く手引きロクロ

型打ち

ロクロ作業を行う前段階の作業で、丸太からある程度椀に近い形に刃物を使って整える工程を指す。木地仕事は分業制で行われていた。

カシュー

「合成漆」とも呼ばれた樹脂塗料で、漆塗りよりも作業工程が少なく、戦後の漆器製作の現場においては漆の代用として使われることもあった。

金作さんが遺したもの

藤村金作さんが木地製作に使用した道具は、県指定文化財として、八幡平市博物館に合計259点が収蔵されている。



田山・館市地区
八幡平市

山とともに あった人生

語り 三浦寅松さん

鹿角街道の宿場町として栄えた荒屋新町から街道を辿って西に向かうと梨木峠に差し掛かる。

この頂きがいわゆる分水嶺。峠を境に東の雨は安比川へと流れ、西の雨は米代川となつて鹿角へと向かう。そして、峠の先で現れるのが田山である。この地域もまた、安比川流域の漆文化を支えた土地のひとつだった。藩政時代には安比川上流域、赤坂田の関左衛門四郎と同じく盛岡藩の御用木地師の命を受けた孫右衛門と与三郎がおり、木地挽きを行っていた。田山はもうひとつの木地の里だったのである。それだけに田山の印象とはやはり山だろう。中心部は水田が広がるが、連なる山々が四方から田を抱き、景色は「田山」の名の通りである。そして、地名はこの地で生きた人々さえも物語る。田を

耕し、山に糧を求めて生きる。それがこの土地の人生であった。

今年で八十七歳になる三浦寅松さんは、「小学校三年生になれば親父について山サ行つたな。炭焼きたあ。冬の山のなかで木を伐つて炭を焼くんだ。学校卒業したら今度は一人で炭焼いて、あとは木伐りの仕事さ。こつただおつきい木を鋸一本でスパツと伐り倒すわけさ。オラの人生は、ずうつと山の中サあつたな」と自らの人生を回想する。いうまでもなく山仕事は過酷である。田山の人間の誰もがやつたという炭



山仕事で生きてきた三浦寅松さん



鹿角街道

古代から存在した街道で流霞道とも呼ばれたが、近世に入ると、城下盛岡と藩領鹿角郡（秋田県）を結ぶ鹿角街道として整備された。江戸期は尾去沢鉱山の産出する銅の運搬に使われ、藩の経済を支える産業道だった。写真は、昭和47年（1972）の荒屋新町。家並みの奥には荒屋新町駅が見える。昭和の時代、鉄道が漆器や木炭産業を支えた。



梨木峠

安代から鹿角へと越える際の鹿角街道の峠で標高483m。菅江真澄や高山彦九郎といった文人墨客が辿つたことも知られる。現在の梨木峠は林道となり、明治になつて新たに開闢された貝梨峠が主要道となつている。

米代川（だんぶり長者）

秋田を代表する河川の米代川の源流部は田山にある。「だんぶり長者伝説」はこの源流部に伝えられる。伝説は、だんぶり（どんぼ）のお告げによつて酒がこんこんと湧き出す泉を発見し、長者になつた夫婦が、天台寺の桂清水観音に願掛けして子（吉祥姫）を授かり、後年、その姫が皇后となつたと語る。そしてさらに時代が経ると、長者や姫の霊を弔うために各地に大日如来が祀られるようになったというものである。田山にはこの長者が暮らしたとされる屋敷跡と、酒

が湧き出したと語り継がれる霊景跡が残されている。



大正期の天台寺桂清水

孫右衛門と与三郎

田山を拠点とした盛岡藩の御用木地師。税を免除される「木地挽御免地」を与えられるなど、田山での木地挽き職人の頭領格だった。

佐比内の山神神社

佐比内地区、御神木が立ち並ぶ山の中腹にある。斧を持った山神像は全国的にも珍しく、山仕事と深い関係があつた田山・館市地区の歴史と信仰を今に伝えている。



伐採に使われたマドノコ

焼きでさえも深山の雪の中に粗末な小屋を掛けて、寝泊まりしての作業だった。それを年端もいかないうちが手伝うのだ。「仕事は辛いも楽しいもねがった。山は好きでも嫌いでもねえな。ただオラたちには山しかねがった。それだけだな」と語る寅松さん。その口から聞こえるのは、田山と呼ばれてきた風土の声、そのものである。

山で生きた人たちが大切にしている場所、それが佐比内の山神神社である。古来より山神への祈りは山仕事に従事する者の最も大切なもののひ



佐比内の山神神社に祀られた山神像。人々の祈りを集めてきた

新町の市日と 漆器の時代

語り 松尾清常さん

鹿角街道の宿場町として栄えた荒屋新町。道の両脇には商店をはじめとする民家が肩を寄せ合うようにして並び、かつての宿場町風情を今に伝えている。安比川流域で漆器産業に従事する者にとつて、この荒屋新町で四のつく日に開催される市日はなくてはならないものだ。漆器や木地の売買はもちろん、予約注文や注文商品の受け取り、原材料や道具の仕入れなど漆器に関わるあらゆるものが行き交った。また、腕の良い職人に関する噂話、新しい口クロの性能、技法の盗み合いなど、職人たちが切磋琢磨する土地ならではの情報のやり取りもあったに違いない。昭和二年（1927）になると鉄道も開通し、交易の町として、さらに活況を呈することになった。

こうした荒屋新町のか



現在の荒屋新町。市日も開催されている

ことなので時代的には漆器産業は衰退期を迎えようとしていた時期。いわば最後の輝きを目の当たりにしたのだろう。そんな松尾さんが独学で木地挽きを始めたのは営林署を退職してから。元々の家業は鍛冶屋だったが第二の人生で選んだのは木地挽きだった。「戦後、あつという間にプラスチックが暮らしのなかに入ってきた。でもここらは塗物の文化。椀なんかの食器はもちろん、味噌樽でも白木じゃなくてシバキ塗りしたものを使った。それが土地の自慢だと思つてきたもの」。



自宅の工房で作業する松尾清常さん

そう語る松尾さんの今の暮らしは、自らが手がけた漆器とともにある。「やつぱり、木と漆ものは肌触りが違うんだな。ここいらの漆器はプラスチックに負けたけど、オフはまた抵抗中だ」と笑う松尾さん。この地が抱く漆器の記憶を守りながら暮らしている。

漆器や木地の売買

漆器の売買については、市日を中心に取引されたほか、卸業者が事前に木地師や塗師に注文することもあった。また、卸業者が買取りや商談を行う場所を設け、そこに職人が商品を持参する場合もあった。そうした商談を行う商店や個人宅のことを「宿」と呼んだ。



市日には椀のほか絵皿も売られた

道具

木地師たちは自ら鍛冶仕事を行い、道具を自作することもあったが、市日で店を出す鍛冶屋に注文することも多かった。手引き口クロの時代は、口クロだけではきれいに仕上げるのができなため、専用の刃物を何種類も必要とした。



椀製作の刃物

鉄道の開通

昭和二年（1927）の鉄道開通に伴い、炭焼きの時代が訪れた。鉄道を使って大量の炭を遠方まで運べるようになったからである。炭焼きは現金収入としては木地仕事より効率がよく、木地師から炭焼

きへと転向する職人も少なくなかった。

漆器産業の衰退期

安比川流域の漆器産業は地域で分業化されており、衰退期は必ずしも同時期ではない。ただし、どの地域であつても昭和30年代からがひとつの区切りになった。安価なプラスチック製品の台頭や炭から石油への燃料の変化、さらに出稼きの一般化など、いくつもの社会変化のなかで漆器産業は衰退していった。



石神の民家に残された製作途中の椀

シバキ塗り

柿渋を塗った後に、生漆を浸した木綿布で拭き上げたもの。主に樽やお膳などに施された。



昭和中期の荒屋新町の市日風景

塗室の内部。床が貼られ、炉が切られていた



浅沢の塗師たちは漆器を藁と稗カラで包み、出荷した



浅沢・五日市・門崎地区
八幡平市・二戸市

豊かさを生んだ 漆塗り仕事

語り 小山田二三男さん

川の中流域、浅沢には五つの集落がある。そのひとつ、石神で浅沢神楽の笛と鉦が久しぶりに鳴り響いた。「神社を改築して以来だから二十九年ぶりだな」と、産土である八幡神社に駆けつけた古老が笑う。今日の秋祭りでの演目は「権現舞」。災いを祓い、福を招く権現様に触れられるとして人々から崇められてきた舞いだ。神事後、笛と

鉦が再び高らかに鳴り響き、雌雄の権現様が舞い始めた。ぎらりぎらり。境内に落ちる木漏れ日を浴び、艶のある黒漆が塗られた権現様の面が妖しく光った。

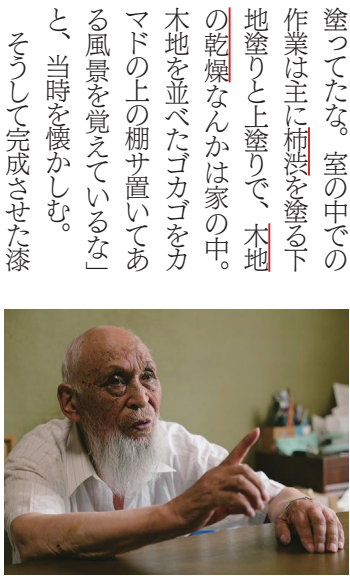
ここ浅沢の歴史をひもとくと「塗り村」としての姿が見えてくる。昭和初期、全百六十戸あったなかで塗り仕事に従事していた家は七十八戸。「漆塗りは浅沢の人々のかけ



浅沢神楽衆と石神集落の人たち

がえのない生業だった」。

そんな風に語ってくれたのは、浅沢岩屋地区の小山田二三男さんだ。昭和五年生まれの二三男さんが知る限り、岩屋では半数以上の家が漆塗りを稼業にしていたという。「塗りをやっている家には必ず『室』と呼ばれる小さな土蔵のような小屋があったんだ。岩屋では八棟。もちろんオウホの家サにもあつて爺様が塗ってたな。室の中での作業は主に柿渋を塗る下地塗りと上塗りで、木地の乾燥なんかは家の中、マドの上の棚サ置いてある風景を覚えてるな」と、当時を懐かしむ。



郷土史家でもある小山田二三男さん

むら ぬりむら 室（塗室）

塗室は間口2間、奥行き2間、高さ6尺ほどの小さなもので内部には炉が切られ、柿渋を貯める甕が置かれていた。唯一現存していた浅沢の岩屋地区の小山田家の塗室は八幡平市博物館に移築された。



塗室は、壁土を塗って建造された

柿渋

下地塗りには豆柿を原料とした柿渋を使うのが一般的だった（渋下地）。そのため、塗師は柿の木を庭に植えて原料を確保していたが足りないときは買つこともあった。

木地の乾燥

かつての木地仕事では、生木の状態で口口口挽きしたので、塗師は仕入れた木地を乾燥させてから漆塗りの作業に入った。

奥南部漆物語を知る
キーワード

浅沢神楽

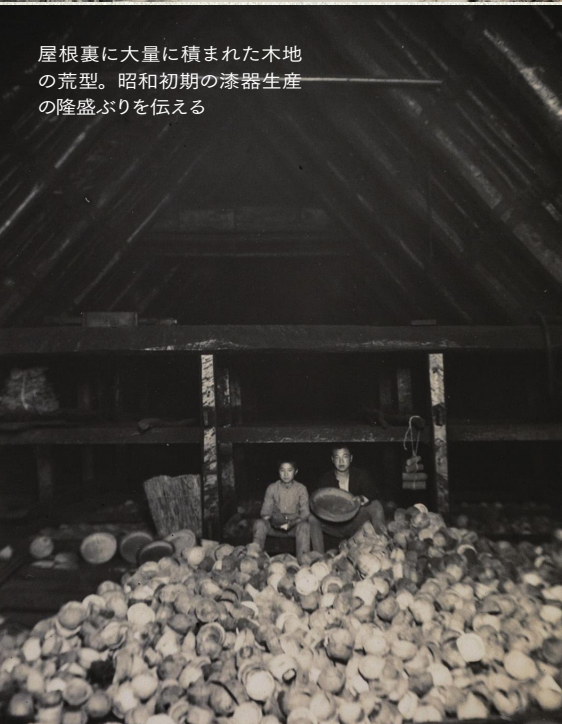
浅沢地区で伝承されている神楽。浄法寺の駒ヶ嶺新山神楽の流れを汲むとされており、小正月になると集落の家々で舞つてきた。過去、この神楽には明治と昭和に存続の危機があり、それを伝承に繋げたのが北口興乃さんと齋藤駒吉さんという二人の翁だった。二人は神楽狂いと呼ばれるほど神楽を愛し、神楽の素晴らしさを後世に伝える役割を果たした。現在は約二十数名ほどの神楽衆で活動している。



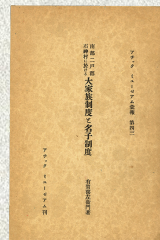
石神の八幡神社で権現舞を奉納する



昭和初期、石神では水車ロクロを使って、木地を挽いていた



屋根裏に大量に積まれた木地の荒型。昭和初期の漆器生産の隆盛ぶりを伝える

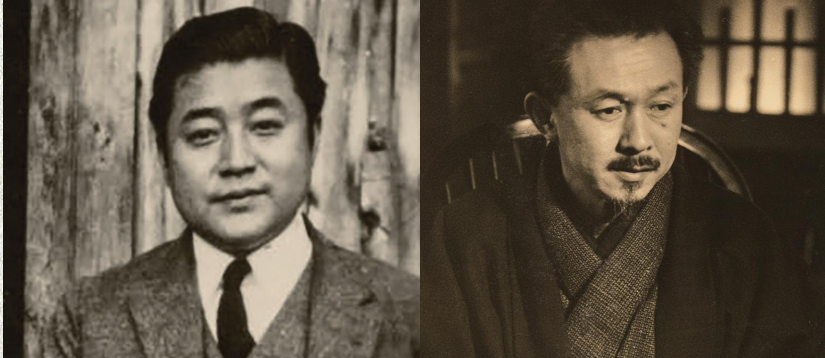


『南部二戸郡石神村における大家族制度と名子制度』

農業や漆器製造業を営み、多くの名子を抱える石神村の大屋齋藤家の暮らしを克明に記録。日本民俗学の金字塔となる一冊は安比川流域から生まれた。有賀喜左衛門・著 昭和14年(1939)アチック・ミュージアム・刊



農業のほか漆器製造業を営んでいた大屋齋藤家。渋沢は自著のなかで「そこに見たこともない巨大な旧家を発見した」と齋藤家の印象を綴っている



渋沢 敬三

しぶさわけいぞう(1896-1963) 民俗学研究所「アチック・ミュージアム」を設立し、民俗学の発展に大きく貢献した

柳 宗悦

やなぎむねよし(1889-1961) 民藝運動の提唱者。東北には20回以上も通うなど、北国の手仕事に魅了された



月刊『工藝』第百八号

柳宗悦が昭和6年(1931)創刊し、昭和26年(1951)終刊。108号の東北特集で、柳は「陸中雑記」という随筆を掲載し、荒屋新町の漆器を賞賛している。昭和17年(1942)、日本民藝協会・刊



『手仕事の日本』

全国の手仕事を調査した柳がそれぞれの地に残る手仕事の素晴らしさを綴る。本書では二戸郡の漆器に関心が寄せられている。昭和23年(1948)、靖文社・刊



柳はひあげを「遥かに正しい美しさが輝きます」と綴った

二人の慧眼がとらえた 安比川流域の 漆器と暮らし

安比川流域の漆器産業に関わる文献をひもとくと、二人の知識人の名前が浮かび上がってくる。民藝運動の提唱者である柳宗悦と民俗学者の渋沢敬三である。二人はほぼ同時代の昭和初期に安比川流域を訪れ、それぞれのアプローチで、この土地が潜在的に持っていた特徴を見出した。

柳は漆器の国を見つけ、
渋沢は家族の姿を見つけた

長い歴史のなかで磨かれてきた職人の手仕事に光を当てようとしていた柳がこの地で見つけたもの。それは言うまでもなく漆器であった。当時、荒屋新町などで売買されていた三ッ椀や絵皿は庶民の生活雑器であり、工芸的価値はないものとされていた。しかし、柳はそうした漆器の在り方を高く評価し、職人の技についても「これだけ活き活きと描き切る画工は他に見当たらない」と賛美を贈っている。柳にとつて、この地の漆器は、手仕事に「健康な美」を求める民藝の精神をまとったものであった。またその眼差しは地域間で連携し、一貫生産がなされる漆器の背景にも及んだ。後年、柳はその

ことを「もしこの村を充分に働かし得たら、日本は漆器の国だという歴史的名譽を取り戻す」と著している。漆器作りを生きる術とする安比川流域は、手仕事の理想郷として柳の眼に映つたのである。

一方、民俗学の視点から日本を見つめていた渋沢敬三は、調査旅行の際に立ち寄った石神村(現・八幡平市浅沢)で漆器製造業を営んでいた齋藤家と出会い、その家族制度に注目する。それは血縁、非血縁を複雑に組み入れながら集落全体をまるでひとつの家族とみなして生きていくという独特の家族の形だった。齋藤家とのこの出会いこそが日本の村落研究の名著『南部二戸郡石神村における大家族制度と名子制度』(有賀喜左衛門著)へと繋がっていくのだが、安比川流域の厳しい自然のなかで知恵を凝らし、逞しく生きる人々の姿は、民俗学の巨人の心を揺さぶるものだったのである。

天台寺に祀られてい
る十一面観音立像



「昔からこの土地では畑を耕せば、甕ツコ（縄文土器）のかけらがジャカジャカ出てきたおや。そこにいつの時代からか観音様の姉弟が暮らすようになって拝んでおったんだおや。ところがある時お堂が火事になって、観音様の弟が飛んで逃げたそう。それが天台寺でな。だから天台寺には十一面観音が祀られておるんだな。一方、お姉ちゃんはそのままこの地に留まってくれてな。わしらの部落ではずっと大切にしてきたんだな」。縄文遺跡と古の伝説だけで、この地を特別な場所と語ることはできない。しかし、この土地にはこんな湧く泉のように物語



観音様の管理を続けてきた春次郎さん

を生み出す何かがあったことは間違いない。もしかしたら、人は想像以上に土地からの声なき言葉を聞きとる力を持っているのかもしれない。ひとしきり昔話をした春次郎さんは「話疲れて、もう眠てえな」と横になり、目をつむった。物語の源泉さながらの土地に暮らす翁は、うたた寝のなかで伝説の続きをつむぐのだろうか。



稲庭岳と裾野に広がる田園



畑から出てきた土器の破片

査の結果、竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵施設、墓、祭場などの諸施設が発見されている。また、遺物は弥生中期のものまで出土しており、縄文から弥生へと移行する過程における人々の暮らしを具体的に示してくれている。

漆塗石刀

本誌28ページを参照

天台寺の伝説

本誌28ページを参照

天台寺十一面観音立像

国指定の重要文化財で平安時代の作と伝えられる。桂の一木造で頭上に化仏を付けているのが特徴。本尊の聖観音立像のように鉦形意匠ではないものの、共通点が見られることから同時期、同一仏師の作とも考えられている。

安比川 支流域 伝説の地

稲庭地区
二戸市

縄文と 観音様の伝説

語り 田口春次郎さん

稲庭岳は浄法寺に暮らす人にとって特別な山だ。標高はちょうど二千メートルほど。山容は優しく曲線を描くように、「岳」という文字に覚える厳しさはない。裾野に広がる田園風景もこの山が持つ穏やかな世界観の続きた。田と畑と林、そして民家がどこまでも美しく調和する。このような土地に暮らしたいと思うのは、人間の素直な願

望なのだろう。事実、稲庭岳の裾野の上杉沢の台地には縄文人の大規模な集落遺跡が発見されている。しかも漆が塗られた石刀まで発掘されており、土地と漆との深い関係性を伝えている。また土地には、天台寺にまつわるいくつかの伝説も語り継がれている。聞かせてくれたのは田口春次郎さん。御歳八十五歳の土地一番の長老だ。

上杉沢遺跡

安比川の支流を稲庭岳方面に上った内陸部の台地に位置する縄文時代の晩期以降の集落遺跡。昔から土器の破片が大量に出てくることで有名な地域だった。平成8年（1996）から実施された発掘調



奥羽山脈北部の一角を占める低山。山名の由来はいくつかあり、山裾の田で刈り取った稲を「はせかけ」にしたところ、「稲の庭」に見えたようなことからこの名がついたとされる。山頂には、奥宮、御神灯、鳥居などがあり、信仰の山としての歴史を伝えている。

奥南部漆物語を知る キーワード

稲庭岳



夕焼け空を背景にして立つ稲庭岳



浄法寺地区
二戸市

昭和の 漆掻き職人

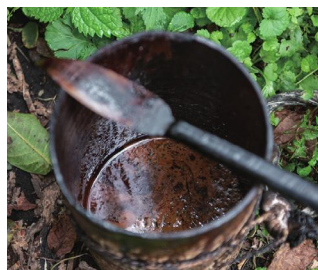
語り 工藤竹夫さん

蟬の音が響く漆の林。漆掻き職人は、木漏れ日の光と影の間を素早く動き回りながら、指先に握りしめた刃物で幹に傷を付けていく。すると木は傷の奥から乳白色をまとった樹液を芳醇な香りとともに滲ませる。「漆」と呼ばれるこの樹液は、我々の血液と同じ。漆掻き職人は、木の命を一滴一滴と分け与えてもらうことを生業にしている。

浄法寺で漆掻きが、いつどのように伝えられたかを史実は語らない。しかし、縄文から一本の糸のように続くこの地の生活文化は、漆を採取し、利用する営みを醸成してきた。天台寺に伝えられる中世の仏具などには漆芸が施され、近世に入ると、藩は漆生産を積極的に奨励した。さらに明治には、越前衆がもたらした「殺し掻き」が広まり、国内有数の生漆の産地と

して成長を遂げた。浄法寺の漆掻き職人たちは、時代の変化に対応しながら安比川流域の漆産業の発展に貢献したのである。今年で八十一歳を迎えた工藤竹夫さんは、戦後から今に続く漆掻きを見つめてきた一人だ。

「オラが漆掻きの世界に入ったのは、昭和三十年頃。職人を雇いながら自分も漆掻きをしていた親父のあとをついて。二年目からは自分で掻くようになったな」と竹夫さん。この時代、安比川上中流域の漆産業はすでに衰退していたが、漆は船の防水や工業製品の製造現場で使われたため、需

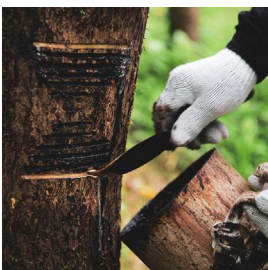


浄法寺漆は、土地の歴史でもある

要は多かったという。「おそらく二百人近くは漆掻きがいたつけ。漆の値段も上がったもの。オラも稼いだ金で自転車買ったな」。しかし、好景気は長く続かなかった。次第に漆の価格は下がり、竹夫さんも、酪農や葉タバコ栽培などの副業にも励んだ。また都市部へ出稼ぎに向かう年も続いた。そんな人生を回想し、「ママ（ご飯）食うためにいろんな仕事をしたな。でも、どんな年でも漆だけは掻き続けたな。見渡してみるといい時も悪い時もあったも自分にとってこれだというのは漆

掻きだったんだな」と竹夫さんは笑う。

昭和と平成が終わり、令和を迎えた今も漆を取り巻く環境は変わり続けている。それでも、竹夫さんのように「これだ」と漆掻きを人生の中心に据える職人たちが今日も浄法寺の漆林で仕事を続けている。浄法寺漆が新たな伝統を語り継げる理由はここにある。



幹の傷から漆を掻き取る

漆が塗られた天台寺の仏具や工芸品はいくつか存在するが、室町時代の作とされる舞楽面はそのひとつだ。質の良い朱漆を重ね塗られた面の数々が残されており、この地で高い漆芸技術が継承されていたことを今に伝えている。



「二ノ舞」で登場する舞面

漆生産の奨励

江戸時代は、漆は樹液に加え、蠟の材料となる実も採取されていた。そこで行われていたのが、樹液を採りながらも木を育てる「養生掻き」だった。盛岡・代藩主の南部利直は、木を掻き殺さないように命令したほか、漆の木の植樹栽培を管理する漆木植立奉行を設けるなど資源確保に積極的だった。盛岡藩にとって漆は財政を支える大切な産業だったのだ。明治に入るとパラフィン蠟が台頭したことで漆蠟の需要が減り、養生掻きから樹液採取に特化した殺し掻きへと変わっていった。



漆の実から作られた漆蠟

殺し掻き

明治に入り、浄法寺に殺し掻きを伝えたのは、福井の越前衆だった。高度な漆掻き技術を持った彼らは資源の豊富な浄法寺に移り住むなどして、殺し掻きを伝えた。これにより浄法寺での漆掻き職人は増加し、最盛期には300人ももの職人が暮らしたと言われている。



越前衆が伝えた殺し掻きの道具

職人を雇う（掻き子）

漆を掻くためには山主から原木を購入しなければならず、そのためにはある程度の資本金が必要だった。しかし、当時の職人の多くは現金を持たなかったため、資本を持つ者に雇われるという形態が一般的だった。「掻き子」というのは雇われる職人のことを指した。



夏の漆の林で作業をする工藤竹夫さん

天台寺の本尊である聖観音立像。平安時代の作とされ、美しい鈿彫の意匠が特徴だ



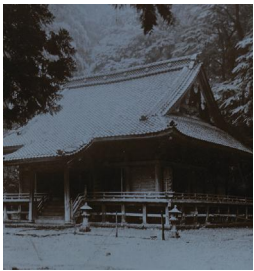
天台寺の僧が民衆に伝えたとされる「御山御器」。この地の漆文化の始まりを伝える椀だ

は、幼少期に見たお祭りから始まっている。「祭りになると杉木立ちの中で煮しめなんかが売られていて、みんなでドブロクを飲んだり、若い人たちが踊ったり、それはもう賑やかでしたよ」と、幸福な光景が残っている。ところが戦後を迎え、世の中が変わっていきなかに次第に天台寺を忘れていったのだという。「祈願寺としての天台寺を時代遅れの古しいものと思ったのかもしれない。やがて奉仕もなくなっていました」。結果、天台寺は境内がススキ野原となつても放置されるほど無惨に荒れた。御神木の伐採事件が起こつたのもそんな時期



天台寺と生きてきた小笠原忠さん

だった。「その後、各方面から復興運動が始まって元の姿を取り戻していくんですが、おかげで我々、坊の人間も目を覚ますことができました」。木立ちを割って伸びる参道を登っていくと天台寺は今日もどこまでも安らかな表情で迎えてくれる。しかし、この天台寺でさえも人々の祈りで支えられ、今にある。忠さんは明日もまた箒を持って参道の階段を登るのだという。



大正時代の天台寺本堂



病を治す霊力を持つという仁王像

明治の廃仏毀釈運動

仏像が焼かれることを恐れた坊の人たちが仁王像を近くの沢に隠し難を逃れたというエピソードが伝えられている。また、明治初年に焼かれたとされる焼け跡が痛ましい菩薩像が残されている。



てっぱち椀は飯椀として庶民たちが愛用した

シバキ塗りのお膳と加飾のない三ツ椀。これらの漆器が天台寺の僧より伝えられたとされる「御山御器」だ。また、「てっぱち椀」と呼ばれる托鉢椀を想起させる大ぶりの椀も天台寺の僧が伝えたとされる。この椀は御山御器よりも古い歴史を持つ椀とも言われている。

僧が伝えた漆器

寺伝によると天台寺の創建は神亀5年（728）のこと。奈良の高僧である行基が開山したと伝えられる。その後、天台寺が歴史舞台に登場するのは南北朝時代となる。江戸時代に入ると、藩の祈禱所として定められ、百石をこえる寺領が与えられた。

奥南部漆物語を知る キーワード

天台寺の創建

御山天台寺 復興への日々

語り 小笠原 忠さん

奈良時代にこの北辺の地に創建され、今日まで無数の祈りを聞き入れてきた天台寺は、浄法寺の人にとって特別なものだ。本誌のテーマである安比川流域の漆文化も源を辿れば天台寺の僧が民衆に伝えたという伝説に端を発している。この土地の生活文化、精神文化ともに天台寺を抜きに語ることはできないのである。しかし、長い歴

史のなかでは天台寺さえも安泰のなかにあつたわけではない。明治の廃仏毀釈運動では仏像が焼かれ、昭和の荒廃期には御神木が伐採されるという苦難を味わってきた。「だからこそ、これからの御山を大切にしたいんです」と語るのは、天台寺の坊の分家として生きてきた小笠原忠さんだ。今年で八十三歳になる忠さんの天台寺の記憶



「御山」と呼ばれ愛されてきた天台寺

暮らしとともにある漆器

安比塗

昭和初期まで安比川流域は国内有数の漆器の産地として隆盛を誇っていた。しかし、戦後の生活様式の変化によって漆器の需要が激減。それは長い歴史を歩んできた漆器産業の衰退を意味していた。

安比川流域の漆文化復興を目指す

こうした時代を経て、昭和58年（1983）に設立されたのが安代漆工技術研究センターだ。この地の漆器産業を途絶えさせてはならない。そのために技術者を養いながら新しい時代に迎えらるる漆器を製作する。この目標に向かって研究センターは踏み出した。

センター設立から今年で四十年。育成した塗師の数は、70人を超えた。また、センターを卒業した塗師たちの活躍の場として安比塗漆器工房が平

成11年（1999）に開設され、「安比塗」を掲げた漆器販売も始まった。

そして今、この安比塗漆器工房が作り続けているのが日常に寄り添う漆器だ。かつてこの土地の食卓にはいつも漆器があった。時代は変わっても漆器の持つ美しさ、使い勝手の良さは褪せることはない。塗師たちはそのことを漆器で伝えるため、今日も刷毛を動かしている。



安比塗漆器工房

安比川中流域の漆塗りの伝統を受け継ぐために開設された。この土地で使われてきた漆器をテーマに、今の日常にも溶け込む漆器の製作および販売を行う

安代漆工技術研究センターでは、漆塗りに関する多彩な技術を教えている



安比川流域の漆文化の奥深さ、漆器の素晴らしさを発信する安比塗漆器工房



幾重にも漆を重ね塗りすることで堅牢になるだけでなく、驚くほどの口当たりの良さが生まれる



浄法寺塗

天台寺のお膝元で伝統をつむぐ

柿渋が用いられたが、漆を下地に使うことでより堅牢さが増すと、惜しげもなく生漆をたっぷり使い、塗り固めていく。また、中塗りでは塗りと研ぎを幾度も繰り返し、緻密な漆の皮膜層を作っていく。そして、上塗りでは選り抜いた漆を一度で塗り上げる。ここから先は塗師ではなく漆の仕事。風呂の中で時間をかけて硬化し、なめらかで美しい艶をまとっていく。

かつて御山御器は「野良御器」とも呼ばれた。野外でもどこでも使える漆器。粗野でありながらも暮らしのなかで愛された漆器。浄法寺の漆器は、まさに人が生きていくための漆器だった。時代は違えど、浄法寺塗が目指す方向も同じだ。それを知る浄法寺塗の塗師たちは今日も漆を丹念に塗り重ねる。



浄法寺塗が通商産業省から伝統的工芸品に指定されたのは昭和60年（1985）のこと。天台寺の僧侶により伝え広められたとされる「てっぱち椀」や「御山御器」をその源流に持つ浄法寺の漆器が「浄法寺塗」として新たな時代に向かって歩み始めたのである。

加飾を施さず
塗り重ねによる
堅牢な漆器

浄法寺塗の特徴は言うまでもなく浄法寺漆を使うことにある。かつての安比川流域の漆器製作においては、下地には

滴生舎

天台寺の参道入口で平成7年（1995）より工房を構える滴生舎。下地から上塗りまですべての工程で浄法寺漆のみを使い、普段使いの漆器を製作している。浄法寺塗の素晴らしさを長年に渡って伝え続けている



漆下地の後の中塗りは合計で7回程度。塗っては研ぎの繰り返しで堅牢な皮膜を作っていく

上塗りを行う前に漆を和紙で濾すことでゴミが除去され、なめらかさが増す



漆器は専用の棚（風呂）で硬化させる

